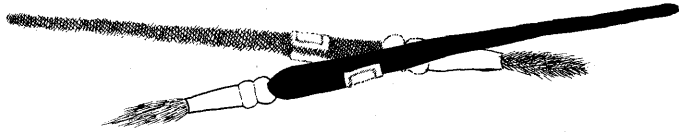


私が幼児教育を志した頃(16)

津守 真

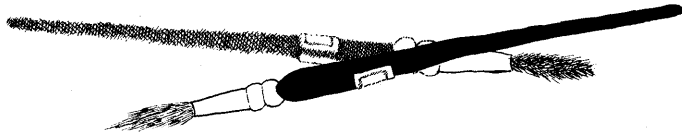
カントリー風ポーチのジギア家

私がミネアポリスで泊めて頂いた六番目の家、ジギア氏は屋根葺きの職人だった。カナダ系のフランス人とアメリカインディアンの混血で、蚊とんぼのように痩せていて、正直な好人物だった。一緒に車でドライブすると、あの家は私が葺いたのだ、あの屋根はこういう特徴が、と屋根の話が聞けるのも楽しかった。毎朝、ブリキの手提げ弁当箱をぶらさげ、仕事着を来てガタガタのダットサンに乗って出かける。ジギア家は市の北部の勤労者階級の地域にあり、カウボーイの映画に出てくるようなカント



リー風のポーチのついた家に住んでいた。ポーチからじかに居間に入るようになっていた。私が学校から帰ると、夫人はいつも街路に面した揺椅子を揺らしながら戸外を見ていた。子どもたちは結婚して、夫婦二人の家なので、大勢子どもがいたコルレツト家から引越してきた私には、静かで寂しいくらいだった。米国の生活にも慣れた私は、風通しの良いポーチの揺り椅子に腰掛けて夏の午後をひとり静かに味わいながら、日本のこと、これからの自分の学問のことなど考える時間をもてたのは有り難かった。涼しい風がエルムの並木の間を通る。青い空と大地が快い。ときどきジギア夫人に話しかけられて考えが中断される。

ジギア夫妻には息子がふたりいて、ふたりとも結婚していた。末の息子は大学一年のときに、ハイスクールの女の子と正式に結婚したが、そのことを母親が知ったのは何か月もたった後だった。ジギア夫人が少しためらいながら私にそのことを話してくれたとき、私がひどくびびりしたからだろうか、その後の話をしてくれた。ジギア夫人は息子をすぐに退学させて働かせた。そうしたら早くも一年くらいで離婚した。息子の妻の母親がとても世話焼きで、毎日あれを買ったか、これを買ったか、今日のおかずは何かと言って指図した。若い夫婦がニューヨークにいたときも、一日に何度もミネアポリスの母親から電話がかかり、夕飯のメニューまで指図されたので息子が独立心を害して、母親と夫とどちらの言うことを聞くのかと言って別れたのだとい

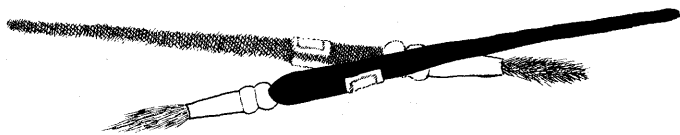


う。でも互いにとっても愛しあっているからいまに仲直りするだろうとジギア夫人は付け加えた。八歳の子どもがいる。

ジギア夫妻

ジギア氏は夕方になると、どこかでウイスキーを飲んで帰って来た。食卓につくと、ジギア夫人にもっと食べる、もっと食べろと言われて、これ以上食べられるものかと言いながら食欲以上に口に押し込まれる。夫人は色白で、造花をつけたつばの広い帽子をいつもかぶっていた。ジギア氏はゴルフ狂で、土曜、日曜にはかならず朝七時から夜八時までゴルフに出かける。飾り棚には大小のゴルフ賞杯をいくつも飾っている。台所にぶらさげであるカレンダーには細かな字でゴルフの日取りと場所が一、二ヵ月先まで書き込んである。

ジギア夫人は三十年来自分はゴルフやめめだと私に淡々と話した。土曜の晩は、二人別々にトランプの会に行く。自動車も、ジギア氏のはペンキがはげたり凹んでいたりするが、夫人のは大型のシボレーで、自動開閉の最新式の窓だった。いつもガレージの中に収まっていて、旦那には使わせなかった。こう言っても夫婦仲が悪いのではない。ある日、例によって旦那が夕飯に帰ってこなかった。私は夫人と先に食べ、夫人が隣家におしゃべりに行っている間にジギア氏が帰ってきた。「ママはどこに行っ

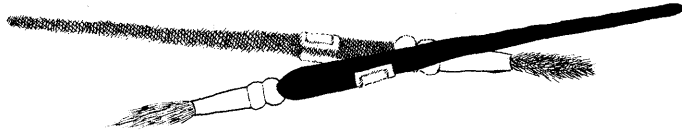


た？」と尋ね、その声を聞いて夫人が戻ってきた。「今夜は残業で、防火扉が閉まって出られなくて遅くなったんだ」とジギア氏は言ったが、三、四間先から酒のにおいがぶんぶんするので、弁解だということがすぐ分かる。ジギア氏は何かにつけて夫人に叱られる、愛すべき存在である。ジギア氏はカトリックで、夫人はプロテスタントであるが、夫人に言わせると、ジギア氏は何十年もゴルフには行くが、教会に行かない。夫人は休日も一人ぼっちである。

ジギア夫人は子ども好きだった。隣家の四歳のサンドラと五歳の男の子が始終台所口に来て、ジギア夫人に本を読んでもらったり、小さな物のやりとりをして遊んでいた。私もよくそれに加わって、ままごとをして遊んだ。お茶大の附属幼稚園でままごとをするときと同じだった。この家を引越すときにはサンドラに会えなくなるのが寂しかった。

大統領選挙

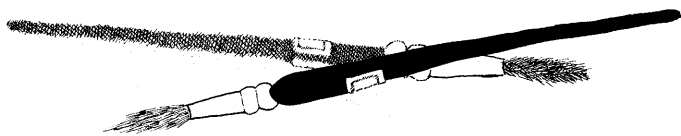
一九五二年はアメリカの大統領選挙の年だった。レパブリカン（共和党）からアイゼンハワーが、デモクラート（民主党）からステイブンソンが候補者に立っていた。新聞もテレビも毎日のように大統領選挙の報道に沸いた。当時のアメリカは冷戦の最中で、コミニズムに対してヒステリー状況にあった。エドガー・フーバーは



マッカーシーと連携して激しくコミニズム非難をし、レパブリックを応援した。私
はフーバーの激しい演説に戦慄を覚えた。

当時の日本は焼け跡が普通の風景で、焼け出された人々の家はトタン屋根のバラツ
ク住宅だった。貧しかったけれども、異国で考えると優しく、美しく、皆が平和を望
んでいるように見えた。原爆は必要悪であるという大統領選の議論は、普通の人が悲
惨な死に方をしたのを知っている日本人には到底受け入れることはできなかった。ミ
ネソタ州は伝統的にデモクラートの地盤だったから、フーバーのデモクラート攻撃に
は快く思わない人が多く、私を泊めて下さった家庭では、例外なしに冷静に考える温
かい人達だったことは私にとって生涯の幸이었다。

七月十日の夕方はものすごい雷雨と稲妻だった。ミネソタの夏は急に天候がかわ
り、晴れていた青空に一点の黒雲が見えたと思うと忽ちに雷鳴と稲妻と大雨に襲われ
る。私はジギア家のポーチで嵐を見ながらアメリカと日本のことを考えた。日本で考
えると朝鮮戦争は遠い地の出来事に思えたが、アメリカで考えるとひどく切迫感感
じた。原爆がいまにも使われるのではないかと異国にあつて日本の家族を案じた。い
ま思うと考え過ぎと思うのだが、当時の日本人には当然の感情だった。その頃は指で
数えるほどしかいなかった私のまわりの日本人留学生たちは、多かれ少なかれ同様の
感想をもっていたことも確かである。私はつましく貧乏で可哀想な日本人と、金持ち



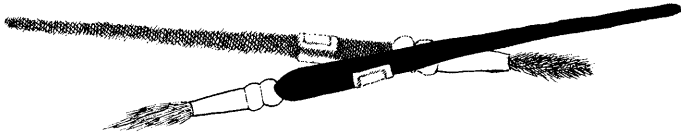
で慎みのないアメリカ人とを対照して考えた。

家庭

私がミネアポリスを去って丁度一年目に、ホワイト夫人からの手紙で、ジギア氏が急死されたことを知った。屋根にかけた梯子から落ちて頭を打ち、そのまま病院に運ばれて意識を回復することなく死んだとのことだった。木曜日に亡くなり、金曜日に埋葬された。ジギア夫人はあのがらんとした家の中でどうやって過ごしておられるだろうかと私は心配した。

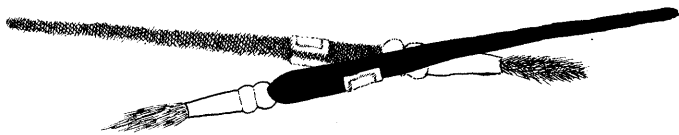
それから数年後に知ったことだが、その後ジギア夫人は記憶を喪失し、病院に入っただま間もなく亡くなったとのことである。

ジギア家は私に深い印象を残した。いわゆるアメリカの典型的な家庭ではない。家族の団欒も少なく、家族の間に何となく食い違いを残し、人々から称賛される家庭ではない。ジギア夫人はいつも物足りない思いで揺り椅子に腰掛けて遠く外を眺めている。お酒を飲んで夕食に間に合わずに帰ってくるジギア氏はいつも夫人に引け目を感じて、小さくなって家に入って来た。そのご主人を亡くしたとき、ジギア夫人は存在の支えを失ってしまった。人目に立たない所で、最も深い愛情で結ばれていたのではないかと私は今になってしばしば考える。



*

この原稿を書いていたとき、米国の国立ディスプレイセンターの養護学校グロバールインスティテュートのディレクターであるクリスティン・パウエルスキー女史が愛育養護学校に訪ねて来られた。一日子どもたちと親しく交わり、母親の懇談会にも参加して夕方暗くなるまで話して行かれた。二〇〇〇年十一月の大統領選挙でレパブリカンとデモクラットが殆ど同数でフロリダ州の票の作業数え直しの最中で、これをどう思うかと尋ねられた。私は一九五二年の大統領選挙のときのアメリカを思い出し、話題はその頃からの米国の教育の変遷に移った。女史は一九七〇年代のコロンビア大学の卒業で、その頃はまだ進歩主義教育の名残があつて、教授は実習生の隣に一緒に座つて実践について討論した。その後、アメリカの教育は急激に変化して学力中心になり、教師は自由を失い、教授も壇上から学生に講義するだけになったことを残念に思つておられた。私がOME Pで何度か一緒になった、OME Pの大先輩でコロンビア大学のゴールドン・クロプフ教授の名を出すと、その人が隣に座つていた自分の指導教官だと言われ、私どもは共通の知人を発見して、アメリカの進歩主義教育とその後について懐かしく語り合つた。この二、三年に、アメリカの教育は再び変化しつつかあるという。親が中心になつてチャータースクールという多様な学校を作る運



動があるという。私は日本語に保育という語があることを語り、教育から保育が失われたことが現代の学校のさまざまな問題を生んでいるという私の考えを話した。

あの頃世界を席卷したマッカーシズムは、何年も経たないで凋落した。エドガー・フーバーはFBI長官を長くつとめたが盗聴事件などで世間から批判されて孤独な死を遂げたのを私が知ったのはごく最近のことである。あのときあんなに激しく人々を巻き込んだ人々は歴史の舞台から去ったが、世界には常に新たな問題が起っている。歴史は繰り返すが、しかし、前のいかなる時代とも違う新たな展開をするのが歴史であろう。私も幼児保育にたずさわる者が、子どもの側に立って日々を過ごすことはいつの時代にも世界平和の土台を作っているのだと思う。